

2020年に行われる4年に1度のイベントと聞いて思い浮かべるのは？と問われれば、多くの日本人は「東京オリンピック」と答えるだろう。だが、おそらくアメリカ人の多くは「大統領選挙」と答えるのではないだろうか。

既に具体的な投票日も決まっており、2020年11月3日（火）に大統領選挙の一般投票（一般の有権者による投票）が行われることとなっている。大統領選挙の投票日は法律により「11月の第1月曜日の次の火曜日」と規定されているためだ。これは投票率を上げるため、農閑期であり、かつ、雪が降り積もる時期でないこと、そしてキリスト教の礼拝日である日曜日以外の日を選んだことなどによるといわれている。

大統領選の大まかな流れ

来年実施されるアメリカ大統領選の大まかな流れは右の図に示す通りである。

2020年の選挙イヤーにまず行われるのは、各党の候補者を決定するための「党内手続き」である。詳細は割愛するが、「党内手続き」を経て選出された各党の候補者同士が、夏以降の「本選挙」を戦うことになる。

民主党からは既に20名以上が大統領選に名乗りを上げる

先に示したように、本選挙ま

ではまだ1年以上の期間があるものの、大統領選挙は既に大きく動き出している。野党の民主党では、年明けの「党内手続き」に向け、各候補予定者が続々と出馬表明を行っている。

アメリカ各所で行われている候補予定者の演説会などはニュースでも大きく取り上げられており、中でもペト・オルーク前下院議員（46）やピート・ブティジェッジ現職市長（37）などはこれまで無名とされていた

前副大統領（76）だ。オバマ政権時に副大統領を務めたバイデン氏は40年を超える政治キャリアを有し、立候補表明前からその動向には注目が集まっていたが、4月25日に大統領選への立候補を正式に表明した後は、各メディアで一層大きく取り上げられている。立候補表明と同日に開催された日米貿易交渉や、その翌日に開催された日米首脳会談が筆者の確認した限り現地メディアでほとんど取り上げられ

ていなかったのに対し、バイデン氏の立候補表明に関するニュースは特集が組まれる、という状況であった。また、立候補表明の遅かったバイデン氏である

耳目を集める アメリカ大統領選

伊澤 岳

（J A 全中 国際企画部 国際企画課（在ワシントン））

が、これら演説会などを通じて支持を拡大し、注目候補の一人までになっている。

しかし、直近で最も注目を集めているのは、やはり本命ともいわれていたジョー・バイデン

が、既に世論調査では民主党候補者の支持率トップを走っている。

来年の本選挙での争点に注目

2016年の大統領選では、トランプ大統領は通商政策に関して、NAFTA（北米自由貿易協定）の再交渉やTPP（環太平洋連携協定）からの離脱などを公約として掲げ当選し、当選後これらの政策を確実に実行に移してきた。

本選挙ではどの候補が戦うことになるのか現時点では不透明ではあるが、アメリカの通商政策が日本に及ぼす影響は大きく、引き続き動向を注意深く分析していく必要がある。

		主な内容
2019年		候補予定者による出馬表明
2020年	2 ～ 6月	党内手続き 予備選挙・党員集会により、大統領選候補者を選ぶための代議員を選出
	7 ～ 8月	
	9月～	各党の候補者による選挙戦 一般投票
	11月	
	12月	選挙人投票
2021年	1月	新大統領就任